The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐徐霊府撰「天台山記」初探
Author(s)	薄井, 俊二
Citation	中国研究集刊. 2001, 29, p. 80-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60937
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

唐徐霊府撰「天台山記」初探

薄井俊二

はじめに

六朝時代から、特定の山岳を対象とした山岳地誌の類が数多く作られるようになる。それらの中には、仏教の僧侶や道教の道士といった、宗教者の手によるものが少なからずある。彼らが山岳地誌を著した背景には、山岳というものが仏教や道教の霊場聖地となっており、宗教者にとって特別の意味を帯びた「場所」となっていたことがあろう。自分らが居を定め、修行を行っている山岳という「空間」を、特筆すべき「場所」として認識し、そこを一定の「まとまり」として捉えて記述の対象とするに至るわけである。つまり、彼らにとって山岳とは、信仰という精神活動に関わる「場所」なのであり、山岳地誌を著述することは、その「場所」を言葉で把握し、文字化して残すという、文化的な活動なのである。それゆえ山岳地誌とは、地理情報の資料であるに留まらず、山岳という「場所」との関わりに関する、人々の精神活動や思想を探る上での、貴重な材料となりうるものなのである。

さて、宗教者による山岳志は、六朝時代のものでは、呉の徐霊期の「南嶽記」、晋の葛洪の「幕阜山記」などが知られている。しかし、廬山慧遠の「廬山記」を除いてほとんどが散逸しており、名前だけが伝えられるか、諸書に断片的に引用されて残されているのみである(注1)。次いで唐代にも、やはり僧侶や道士による山岳志が数多く作られるが、本文がまとまって伝存しているものも何点か見られるようになる。沙門恵祥の「清涼山伝」、道士李沖昭の「南嶽小録」、同じく道士杜光庭の「青城山記」などがそれである(注2)。

この他、道士徐霊府の手になる「天台山記」という書物がある。宋代くらいを境に逸書となり、書名のみが伝

えられていたものであるが(注3)、明治の初めに楊守敬によって発見され、『古逸叢書』に収録されて世に知られるようになった。さらに、楊守敬が翻刻に用いた原本と思われる写本が、日本の国立国会図書館の蔵書として公開されるに至った。これにより、「天台山記」についても、その本文を対象にした研究が行える環境が整ってきた。

そこでこれより、宗教者による山岳地誌のひとつとして「天台山記」本文を対象とした研究を行っていくことにするが、本稿ではその第一段階として、新たに公開された国立国会図書館蔵本（以下「国会蔵本」と略称）をもとにしながら、「天台山記」の概略について基礎的な検討を加えてみることにしたい。

本稿では、先ず「天台山記」の資料的な問題を確認し、次いで国会蔵本の由来について私見を述べる。次におおまかな内容の検討を行った上で、撰者と思われる唐の道士徐霊府について調べる。最後にそれらを踏まえて、徐霊府と「天台山記」との内容的なつながりについて、現時点での検討結果を述べることとする。

一　「天台山記」の資料的な問題

先ず、本節では、現存する「天台山記」の写本と刊本について、簡単な整理をしておく。

先に述べたように、「天台山記」は、中国本土では長らく逸書となっていた。明治の初め、駐日公使何如璋の招きで来日した楊守敬が、日本で入手した稀覯本の一部を『古逸叢書』として刊行したことは周知のことであろう。中国では光緒十年（一八八四）、明治十七年に当たる年に刊行された、この『古逸叢書』の中に「天台山記」がある（以下「古逸叢書本」と略称）。

古逸叢書本の表紙には「影舊鈔卷子本天台山記」とあり、本文は線装本で十八丁からなる。「影」と称するように、原本とした写本をそのまま木版で復刻したもので、筆使いや虫食いの跡などもかなり忠実に再現しようとしている。そして、文字として識別不可能なもの、明らかな誤写や誤読に基づくと思われる文字の誤りなども、訂正することなく原型のまま翻刻している(注4)。

「天台山記」を『古逸叢書』に収載した理由について、楊守敬は「唐道士徐霊府撰。見直齋書錄解題及通志略。其書與琱玉集皆小說家言。以唐人著述日少、仿四庫著錄桂林風土記例收之」（「古逸叢書叙目」）と述べるに留まる。「小説家言」にすぎないのだが、「唐人著述」が少なかったので収載したと、いささかいいわけめいた口調で

ある。「天台山記」を入手した経緯については、『古逸叢書』には何も記述がない。「日本訪書志」などの、彼が日本で目にした書物の目録類にも記載はなく、楊守敬の書き込みがあるとされる「楊守敬手批経籍訪古志」にも収載されていない(注5)。また古逸叢書本の原本となった写本本体も、その後の所在は長らく不明であった。

さて、楊守敬自身は、控えめな口振りであったが、『古逸叢書』における「天台山記」の復刻は、小さからぬ反響を呼んだようである。光緒十四年(一八八八)に刊行された、陸心源の『唐文拾遺』に、早速「天台山記」が収録されている(以下「陸心源本」と略称)。これは『古逸叢書』刊行のわずか四年後のことである。陸心源は、草・行書体に近かった古逸叢書本の字体を、すべて楷書に改めている。当然文字の解読が行われているのだが、その際、かなり意を以て文字を削除したり、文を整えたりしている(注6)。文献として読めることを優先させているわけである。

また日本でも『大正新脩大蔵経』に収録されることとなり、昭和二年(一九二七)刊行の第五十一巻に、活字版で収載された(以下「大蔵経本」と略称)。これも古逸叢書本を底本に解読を試みているもので、陸心源とは異なった解釈をしているところが少なくない。おそらく『唐文拾遺』は参照しなかったのではないか(注7)。

管見の及ぶ限り、「天台山記」の刊本は以上の三種類である。しかも、陸心源本・大蔵経本のいずれもが古逸叢書本をもとにしており、テキストの系統としては、一本である。

先に述べたように、古逸叢書本の原本となった写本本体は、長らく所在不明であった。ところが、現在国立国会図書館に所蔵されている「天台山記」がその原本である可能性が高いことが明らかになった。

国立国会図書館は、開館五十周年にあたる平成十年(一九九八)に、「国立国会図書館開館五十周年記念 貴重書展」を開催し、古い刊本や写本を含む所蔵の貴重書を、数多く公開した。さらにその一部を、国立国会図書館のインターネット・ホームページ上に、写真映像で公開している。その公開されている貴重書の中に、徐霊府撰「天台山記」がある(注8)。

国会蔵本と古逸叢書本とを比べてみると、文字の異同を初め、それぞれの文字の細かい筆使い、虫食いなどによる欠落や汚れに至るまで、両者はほぼ一致している。また写本である「天台山記」は、一行に記されている文

字数が、それぞれの行によってかなりばらつきがある（十六～二十一文字）。しかし、国会蔵本と古逸叢書本とは、どの行を取っても文字数が全く一致する。一方がもう一方を模写したものであることは、明らかである。

しかし、本文部分はほぼ一致するものの、異なる点も数点ある。そのひとつが一頁に収められている行数である。国会蔵本は、一頁に七行のものと八行のものとがあるのに対し、古逸叢書本ではすべての頁が八行で統一されている。表紙の記載にもかなり異同があるほか、国会蔵本には『仏祖統記』巻十法師諦観伝が附載されているのに対し、古逸叢書本には『直斎書録解題』の「天台山記」の部分が附録としてついている。

国会図書館が「天台山記」を購入した経緯は明らかではない(注9)。国会蔵本には、一丁表に「帝國圖書館藏」及び「明治三六・七・一五」の朱印が押されている。これによれば、明治三十六年（一九〇三）に、国会図書館の前身である帝国図書館の所蔵となったようである。

明治三十六年は、『古逸叢書』刊行から約二十年を経ている。そこで、古逸叢書本を元にした精巧な贋作が作成され、帝国図書館に売却されたという可能性も全くないではない。しかし、先に述べたように、両者は微妙に異なる部分がある。贋作であれば、特に形式的な点では同じものを作ろうとするのではないか。一行に記されている文字数を同じにしておきながら、一頁の行数だけを変えるというのは全く不自然である。しかも、古逸叢書本では、「一律八行」と整然としているのに、国会蔵本では「七行」ないし「八行」と、逆に不揃いになっている。また末尾に附載されている資料としても、古逸叢書本の『直斎書録解題』と国会蔵本の『仏祖統記』とでは、前者の方が附録としてより適切な選択であろう。わざわざ、より不適切な資料と差し替えるというのは、贋作の作り方として適当な方法ではないだろう。こう考えてくると、国会蔵本が古逸叢書本を元に作られた贋作であるという可能性はかなり低くなる(注10)。

むしろ、国会蔵本をもとにしながら、楊守敬がその「見識」によって一部を改めたのが、古逸叢書本である、という理解の方が妥当であろう。即ち、『古逸叢書』へ収録するにあたり、楊守敬は原本の「天台山記」に対し、それがより「純良」なるテキストとなるよう、意を以て修正を加えたのではなかろうか。原本で不揃いであった頁ごとの行数を「一律八行」に整理し、附録資料も、漢籍を扱う学者の観点からより適切だと判断される『直斎書録解題』に差し替えたというわけである(注11)。以上のように考えてよいならば、古逸叢書本は、国会蔵本をも

とにして模刻されたものであり、国会蔵本は古逸叢書本の原本であると判断して差し支えないであろう。

以上、「天台山記」に関する写本と刊本のあらましについて検討した。繰り返すならば、国会蔵本が伝存する「天台山記」の第一次資料であり、それを模刻したのが古逸叢書本である。その古逸叢書本を更に解読して刊行したのが、陸心源本と大蔵経本ということになる。こうであれば、今後「天台山記」を扱うにおいては、国会蔵本を基本にして考えなければならなくなる。本稿でも、「天台山記」を引用する際には、国会蔵本をもとに行うこととする。

二　国会図書館蔵本「天台山記」の由来

本節では、国会蔵本「天台山記」の由来について私見を述べる(注12)。

国会蔵本「天台山記」は、誰の手によって筆写されたのだろうか。この点に関連して、国会図書館刊行の出版物に「安然」という人物の名が見える。

昭和六十二年刊の『国立国会図書館漢籍目録』には、「史部・地理類・山水之属」に「天台山記一巻 唐徐靈府撰 平安後期釋安然寫 一冊」とあり、釈安然が筆写したとしている。一方、平成十年の「貴重書展解題」では、「天台山記(てんだいさんき)」(唐) 徐霊府著〔平安時代後期〕写 一冊」「本書が安然の筆になるものかは未詳」とし、安然の関わりを示唆するものの、筆写した当人であるかどうかについては、結論を保留している。

実際にホームページ上の国会蔵本を見てみると、書物が入っていたとされる袋に「安然先生古蹟」の字が読める。また本体の表紙には、中央上部に「天台山記」と書名が太字で記され、その右肩に細字で「安然書」と書かれている。袋の記載を信じるならば、国会蔵本「天台山記」を筆写したのは、安然ということになろう。しかし、この袋には、先の言葉に続けて、「黎庶昌古迭叢書中」という文字も見える。これらは、古逸叢書刊行以後に書かれたものであると考えたほうがよいだろう。袋に文字を記した者は、書物本体の表紙に「安然書」とあるのを見て、安然が筆写したと判断したにすぎず、それ以外の根拠はあるまい。そうであれば、表紙の「安然書」という記載だけを、手がかりとしなければならない。

安然という名の人物は、おそらく数多くいたであろうが、最も有名なのは、平安中期の延暦寺の学僧、五大院安然であろう。そこでこの安然について見てみよう。

末木文美士氏の研究によれば(注13)、安然は、仁明天皇の承和八年(八四一)の生という。貞観元年(八五九)十九歳で受戒し、初めは慈覚大師円仁、ついで僧正遍昭について、延暦寺で修行を積んだ。没年は不詳だが、寛平元年(八九九)に活動した記録があり、およそ九世紀後半から十世紀初めに活躍したようである。彼は、天台教学、特に天台密教(台密)の大成者とされ、「真言宗教時義」や「菩提心義抄」などの重要な著作を残した学僧であった。

ではこの安然と「天台山記」との間には、どのような関わりが考えられるだろうか。実は安然には、入唐の計画があった。「日本三代実録」によれば、陽成天皇の貞観十九年(八七七)閏二月(注14)、安然は、入唐求法のための駅馬を賜り、太宰府へ向かったという。安然が実際に唐へ渡ったのかについては不明であるが、少なくとも彼に渡唐の計画があり、それが実現の一歩手前までいったことは間違いないようである。そうであれば、入唐の準備を進める段階で、これから訪問する中国や天台山に関する資料を安然が渉猟した可能性はある。ともかくたどり着ければ先ずは良しとした最澄や円仁の時代とは異なり、安然の頃には、周到な準備をして、確実な成果を期待して入唐に臨むというのが常識になりつつあったようである。それは安然の先輩にあたる、円珍の入唐の様子から伺える(注15)。そうした入唐準備の段階で、書籍に詳しい安然が、「天台山記」の存在を知り、それに着目した可能性はある。

また安然に、「諸阿闍梨真言密教部類惣録」という著述があったことも注目される(注16)。この書は、「八家秘録」とも呼ばれているもので、最澄・空海・円仁・円行・恵運・常暁・円珍・宗叡という、入唐八僧が将来した典籍を整理分類したものである。安然は、自らが入唐を果たすことはできなかったようであるが、先達たちの成果である将来典籍を体系的にまとめようとしたのである。この整理の過程で、入唐僧撰述の将来目録を精査するとともに、将来典籍の現物や写本も数多く目にしたのではないか。現行の「諸阿闍梨真言密教部類惣録」には、「天台山記」は収録されていない。しかし、目録作成の過程で、安然が唐よりの将来典籍の中にあった「天台山記」に接した可能性は少なくないと考えられる。

以上見てきたように、五大院安然が「天台山記」を筆写した、もしくは所有したという確かな証拠はない。しかし、いくらかの状況から見て、彼が「天台山記」という書物に接した可能性はかなり高いのではないかと思われる。

では、仮にこの推論が妥当だとして、安然はどこで「天台山記」を目にしたのであろうか。彼は天台の僧侶であるわけだから、当然延暦寺において、ということになろう。山門派と寺門派が分裂する以前の比叡山には、三つの重要な経蔵があったとされる(注17)。最澄蒐集の書物を納めた「根本経蔵」、円仁将来の密教典籍を納めた「真言蔵(前唐院蔵)」、そして円珍が建てた「山王蔵(後唐院蔵)」である。これらには、唐よりの将来典籍を中心とした書籍が、仏典を中心に収蔵されていたようである。そして外典であっても、三師将来の貴重なものであれば、ここに収蔵されていたものと思われる。「天台山記」もこのいずれかに収蔵されていて、安然の目に触れるに至ったものと推測できる。

最後に、そもそも「天台山記」が日本へ持ち込まれたのはいつのことで、それは誰の手によったのか、ということを検討しておく。

結論からいえば、「天台山記」を日本へ将来したのは、智証大師円珍であろうというのが私見である。以下述べてみる。

智証大師円珍は、唐宣宗の大中七年(八五三)に入唐し、天台山や都の長安に滞在して数多くの典籍等を蒐集し、大中十二年(八五八)に帰国した。彼には詳細な将来目録があることは知られているが、現存するのは次の五点である。即ち、①「開元寺求法目録」、②「福州温州台州求法目録」、③「青龍寺求法目録」、④「国清寺求法目録」、⑤「入唐求法総目録」の五者である(注18)。このうち、②④⑤に「天台山小録一巻」という記事が見える。これが、安然の見た「天台山記」ではないか、というのが私見である。

④と⑤の目録は、唐から帰国するにあたり、それまで蒐集した書物をまとめたもので、①②③など、先行する目録を整理し、統合したものである。ここに収載されているということは、円珍が日本に持ち帰ったものであることを示している。これにより「天台山小録」なる書物が、円珍によって将来されたことが確認できる。

また②は、渡唐した最初の年に、滞在した江南の地で蒐集した書物を、随時書き留めていったものである。そして「天台山小録」の項は、「已上、於天台山國清寺寫取」の範囲に記載されている。つまり、「天台山小録」という書物は、円珍が天台山国清寺に滞在していた、大中七年十二月十三日から、同八年の九月までの間に、円珍自身の手によって筆写されたものということになる。

円珍が「天台山小録」なる書物を目にした大中七年は、本文に記載されている「天台山記」の成立年である宝暦元年(八二五)からおよそ三十年後である。この間、会昌の排仏などの大事件も起こっているが、円珍滞在当時は比較的落ち着いており、円珍も穏やかな雰囲気の中で在唐生活を送っている。少なくとも、国清寺滞在当時の記録からは、仏教と道教との激しい確執の様は伝わってこない。その中で、天台山に関する手頃な地誌として、「天台山記」が仏教側の人々にも読まれていたことは十分考えられる(注19)。まして円珍は日本人であり、仏道の対立抗争の中に身を置いて来たわけではない。天台の僧侶から、あるいは在家の人から示された「天台山記」を目にして大いに興味を持ち、筆写して持ち帰ろうと考えたとしても、さほど不思議はないであろう。

また「天台山小録」という書名についていえば、唐代の山岳地誌で、「〜小録」と称する例は、李沖昭による「南嶽小録」などがある。また、南宋時代の地方志である「嘉定赤城志」には、「徐霊府小録」として、八条あまりの文が引用されている。これらの引用は、すべてが、国会蔵本「天台山記」の記事と一致している(注20)。ここから、「天台山記」は、「徐霊府小録」とも称されていたのではないかと推測される。こうした事柄を考え合わせると、「天台山記」は、「天台山小録」や「徐霊府小録」などの異称を持っていたのではないか、と考えられるのである。

以上、かなり推測を重ねてきたが、仮に円珍が持ち帰った「天台山小録」が「天台山記」であるならば、それは執筆から約三十年後に、円珍自身の筆で、天台山の国清寺において筆写されたものであるということになる。仏者である円珍が、道士の書いた地誌をどの程度解読できていたのかは分からない。あるいは意味がよく分からないままに書き写したところもあるかも知れない(注21)。しかし、それだけ忠実な筆写を心がけたであろうから、不用意な脱落や要約などはなされなかったものと思われる。この点、円珍将来のテキスト、並びにそれを筆写したと思われる国会蔵本「天台山記」は、徐霊府の書いた原形をかなりとどめているものであると考えてよいのではないか。

そして、円珍によって筆写された「天台山記」は、おそらく写経生などによって写本が取られ、保存された。そのうちの一本に安然が何らかの関わりを持ち、その本が幸運にも伝承され、明治になって楊守敬の入手するところとなったではなかろうか。

三　内容概観

（一）分量の面から

前節まででは、「天台山記」に関する資料的な問題を検討した。次に本節以降では、「天台山記」の本文と撰者とされる徐霊府について、基礎的な検討を加えていく。先ず本節では「天台山記」の内容を概観しておく。

先ず分量を見ると、総文字数は、およそ五千七百言である。国会蔵本は、粘葉装の十九丁からなり、全一巻である。現存する同時代の山岳地誌と比べると、「清涼山伝」は二巻でおよそ一万二千言、「南嶽小録」は一巻でおよそ五千言、「青城山記」は約千六百言である。「青城山記」はやや小振りだが、他はおおよそ一巻で五千言から六千言くらいであり、「天台山記」もほぼその範囲に収まる。前節で見た、国会蔵本が、徐霊府の原本をほぼ留めているのではないか、という推論は、この点からも強化されよう。

（二）内容の概要

次におおまかな内容を述べておく。

国会蔵本「天台山記」は、改行改頁もなく、小見出しの類もつけられていない。はじめからおわりまで、脈絡なく記事が続いているように見えるが、内容から見れば、大きく四つの部分に分けられる。最初に、天台山全体のことを述べる「叙岳部」(注22)がある（一丁表～四丁表）。次に、天台山に点在する、諸山や名勝、また仏道に関わる施設や史跡、それらにまつわるエピソードなどを述べる「各部」（四丁表～十八丁裏）があり、さらに、天台山周辺の諸山のことを述べる「周辺諸山部」（十八丁裏～十九丁裏）がある。そして最後に、本書を撰述した経緯を述べる「総序」（十九丁裏）がくる。

以下各部について簡単に内容を紹介しておく。

先ず「叙岳部」は、天台山全体について概観したものである。ここには、「天台山」の位置、規模、名称の由来などが述べられている。また天台山が道教では洞天の一つに数えられており、桐柏真人王子晋に関わりの深いところであることを述べる。またこの部分は、諸書より文を引き、それに解説や反論を加えるという形式で記述されている。引用されているのは、陶弘景の「真誥」「登真隠訣」、葛洪の「抱朴子」などの道教関係の文献が多く、

孫綽の「遊天台山賦並序」や顧愷之の「啓蒙記」なども引かれている。

文章全体の初めに「序論」的なものが置かれるのは、中国の古典籍では一般的で、山岳地誌でも同様である。最初に対象とする山に関する全体的な事柄を述べ、その後各地の名勝や施設を述べてゆく。また、重要な典籍からの引用で語り始めるというのもよく見られる。「清涼山伝」は「華厳経」菩薩住処品、「南嶽小録」は「周礼職方氏」の引用から始めているが、「天台山記」では、孫綽の「遊天台山賦序」の一節が冒頭に掲げられている。

次に「各部」だが、分量的には全体の八割を占める。この部分も、小見出しをつけるなどの明確な分節意識は見られず、長短の記事が際限なく羅列されているかのごとくである。しかし、内容から見ると、おおむね四つの部分に分けられているようである。それは、「天台観地域」「桐柏観地域」「赤城山地域」「歇亭地域」の四者である。そしてこの四者は、「天台観」を基点とし、そこを基準に配置されているように見える。

即ち、「天台観」を第一の中心とし、その周辺に展開する名勝旧跡を記述したのが「天台観地域」（四丁表～六丁表）である。ここでは、翠屏巌・瀑布・柳史君の旧宅にあたる紫霄山居・瀑布寺・百丈巌・九峯山などが述べられ、柳史君・葛洪・王羲之と支遁に関する記事が収録されている。

「天台観」を基点とし、その北方十二里にあたる「桐柏観」が第二の中心となる。ここを中心とした一帯が「桐柏観地域」（六丁表～十三丁表）である。

この部分には、桐柏観へ至る道筋にある桐柏洞門、観の南西部に展開する降真塘・王真君壇・三井や、そこからやや西部にある仏窟院などが記載されている他、桐柏観から西北部にある瓊台、同じく東北部にある華林山・方瀛山・玉霄峯なども含まれる。また、睿宗によって桐柏観が造営されたこと、玄宗によって重修されたことを記録する。その中で司馬承禎の名が上がっており、彼と王羲之との書法に関するエピソードも収録されている(注23)。この他、玄宗による王真君壇の小殿創立、高宗・玄宗らによる三井における醮祭の記録、陳寡言が華林山に居り、徐霊府が方瀛山に居を構えた話などが収録されている。

そして一旦基点に戻り、再び「天台観」から東へ十五里進んだ地点にある「赤城山」が第三の中心となる。赤城山周辺と、そこから北東十五里の地にある禅林寺までを扱うのが、三番目の「赤城山地域」（十三丁表～十四

裏）である。

赤城山の部分では、山内にある国清寺や中巌寺、これらの仏寺に関わる白道猷や智顗などの記事も収録されている。また禅林寺やその西北にある陳田なども仏教がらみの施設であり、「赤城山地域」の部分は、仏教関係の記事が多くを占めている。

最後の四番目の地域が、「禅林寺」から更に西北へ二十里の地点にあたる「歇亭」を中心とした一帯である。これが「歇亭地域」（十四丁裏〜十八丁裏）である。この部分は、歇亭から北東にある霊墟・西にある石橋・北にある華頂峯までも含めた、やや広い範囲を扱っている。

ここでは、霊墟が司馬承禎が修行をしたところであることから、彼に関するエピソードを数多く収録している。司馬承禎の修真の施設である思真堂の由来、彼の手になる韻文の「霊墟頌」などが収録されているほか、睿宗による招聘とそれへの対応、玄宗の招きによって遂に天台山を降り、王屋山に移り住んだことなど、かなりたくさんの記事がある。また、華頂峯の部分でも、司馬承禎が造営した天尊堂について言及されている。

「各部」の次に「周辺諸山部」がある。ここでは天台山の北にある剡県の金霊観と香炉峰、西北にある天姥山、大唾小唾の二峯が取り上げられている。また、劉晨・阮肇の二人が仙人に遭遇したという、有名な話を紹介するが、これは天台山においてではなく、この天姥山においての出来事であったとしている。

最後の「総序」は、四十字程度のものだが、書誌学的な点で重要である。そこには徐霊府が衡山から天台山へ移った年や、「天台山記」を記した年などが書かれており、全体の締めくくりの文となっている。

（三）内容上の特色

次に「天台山記」の内容上の特色を検討しておく。先ず「天台山記」に引用されている書物や文章を調べてみる。

① 陶弘景「真誥」　4条
② 陶弘景「登真隠訣」　1条
③ 「名山福地記」　2条
④ 葛洪「抱朴子内編」　1条
⑤ 「法輪経」　1条

⑥「仙経」　1条
⑦先生「霊墟頌」　1条
⑧睿宗の詔　2条
⑨玄宗の詔　1条
⑩孫綽「遊天台山賦 並序」　6条
⑪顧愷之「啓蒙記」　1条
⑫「旧図経」　1条
⑬「図経」　1条
⑭本起伝　1条
⑮本伝　1条

以上十五種類、二十五条である。①～⑦は、道教関係の資料と思われるもので、この種類が一番多い。しかも①の「真誥」等には現行本には収録されていない記事などもあり、注目される。⑧と⑨は皇帝の詔勅で、いずれも、司馬承禎を都に召還しようとした時のものである。その他由来が不詳のものも見られ興味深いが、ここでは道教関係のものが多いこと、唐帝の詔勅が紹介されていることを指摘するに留める。

次に、取り上げられている人物や事件、エピソードなどについて、特徴的と思われる事柄を四点ほど指摘しておく。

一点目は、当然のことながら、道教や道士に関わるものが多いことである。取り上げられている真人や道士は、桐柏真人(王喬)、浮丘公、茆司命(茅盈)、葛仙公(洪)、顧歓などであり、唐代の道士でも、司馬承禎(白雲先生)、玄静先生(李含光)、そして陳寡言や徐霊府自身の記事がある。これらの中でも、司馬承禎の記事が多数を占めることが注目されよう。

司馬承禎（六四七～七三五）が唐代道士の中でも第一級の人物であることは周知のことであろう。彼は嵩山で修行を始め、後に天台山に入山し、最後は玄宗の請いを容れて王屋山に移りその地で没している。天台山を根拠として活動した時期が長く、エピソードも豊富なのだが、その多くが「天台山記」にも収録されている。王羲之との書法に関する説話などは、他書には見えず、現存のものではこの「天台山記」によってのみ、知りうるものもある。こうした司馬承禎の登場回数の多さと、彼に対する注目ぶりは、読むものをして、天台山と司馬承禎との関わりの深さを強く意識させるものとなっている。

二つ目は、唐室との関わりを示す記事が多いことである。例えば、三井における「投龍璧」の儀式は、高宗永淳二年(六八三)、玄宗開元二十五年(七七三)、敬宗宝暦

元年（八二五）の、都合三回の記録を載せる（いずれも十一丁表）。施設造営では、玄宗による王真君壇の造営（開元元年、十丁表）、同じく玄宗による桐柏観の重修（天宝年間の初め頃、九丁表）等の記事がある。特に桐柏観の造営に関連しては、郡守賈長源や太史崔尚による立碑にも言及している。また睿宗や玄宗が、頻りに司馬承禎を招聘したエピソードも収録されている（八丁裏、十五丁裏、十八丁表）。このような記事により、天台山と帝室との深いつながりが強調されているかのごとくである。

以上の二点は、「天台山記」で特に重視されている事柄をあげたものといえる。撰者の興味の所在、天台山に関連して強調しておきたいことに、司馬承禎と唐の帝室があったことを伺わせる。

三つ目の特色は、仏教に対してあまり排他的ではないことである。「天台山記」には仏寺や僧侶など、仏教関係の記事も少なくない。ことに「赤城山地域」では道教関係の記事よりも仏教関係のものの方が多いほどである。しかも、その記述ぶりには仏教をおとしめるような気配はなく、淡々と寺院やエピソードの紹介を行っている。唐代にあっても仏教と道教とは激しく勢力争いをしていたわけで、相手を論難したり、批判する文書も数多く飛び交っている。しかし、「天台山記」における仏教関連の記述は、実に冷静で排他性が感じられない。そこには頑迷な排仏主義の色彩は乏しいと言える。

四つ目の特色は、尚古主義の色が薄いことである。自説の優位さを説こうとする際に、それがより古い時代に遡りうることを以て優位さのよりどころとする、いわゆる尚古主義の傾向が中国の文化に強いことは周知のことであろう。仏道のことで言えば、老子が釈迦に教えを授けたとする「老子化胡説」などは、その典型であろう。しかし「天台山記」にあっては、「古さ」へのこだわりはあまり感じられない。

例えば、天台山と道教の関わりの古さを主張する話として、劉晨・阮肇が神仙と遭遇した説話（後漢時代に比定される）や、呉主孫権による桐柏観創建説がある。この二つは「天台山記」にも収録されてはいるのだが（前者は十九丁表、後者は四丁裏）、いささか冷淡な扱いを受けているといってよい。劉阮の二人が神仙に遭ったのは、実は天台山においてではなくて、隣接する天姥山においてであるとされている。また孫権による桐柏観創建の記事も、「旧図経」なる書物からの引用として紹介されているに留まり、「天台山記」の地の文による言及はない。もちろん「天台山記」に古いことを優位と考える姿勢が皆無だというのではない。ただ劉阮説話や桐柏観創建説の

場合に現れているように、いささか疑わしい点があっても、何がなんでも「古さ」を主張するというような、頑迷な尚古主義からは脱却できているのではないか。この点と、三番目の特色として指摘した、頑固な排仏とは無縁であることを考えあわせると、「天台山記」の撰者は、比較的冷静な、バランスの取れた視野の持ち主であったように思われる。

四　徐霊府の伝記

本節では、「天台山記」の撰者と目される徐霊府について、調べておく。

中国本土に伝えられる伝記資料などには、唐代に徐霊府なる道士がいたことが確認される。そこで先ず、この道士徐霊府と、国会蔵本「天台山記」の撰者とされる徐霊府とが、同一人物であることを確認しておきたい。

国会蔵本の本文には次のような部分がある。

（ア）「天台山記　方瀛觀徐徵君纂」　……一丁表一行目

（イ）「自觀（稿者注：桐柏観）北上一峯可里、有方瀛山居。……中略……。西接瓊臺、東近華林。卽靈府長慶元年、定室於此。是天台第二重。」

……十二丁表七行目～十二丁裏四行目

（ウ）「靈府、以元和十年、自衡岳移居台嶺、定室方瀛。至寶曆初歲已逾再閏、修眞之暇、聊採經誥、以述斯記、用彰靈焉。」

……十九丁裏三行目～五行目

ここから読みとれることは、国会蔵本「天台山記」の撰者は名を「徐霊府」といったこと（ア・イ・ウ）。彼は元は南岳衡山にいたが、元和十年（八一五）に天台山に移り住み（ウ）、のち長慶元年（八二一）には桐柏観の北に位置する方瀛山に居を構えた（ア・イ・ウ）。そして、宝暦初歳（八二五）に至って「天台山記」なる書物を脱稿したことなどである。また（ア）に見える「徵君」という呼称は、「詔書によって召されても仕官しなかった学問ある士」の尊称で、唐代では道士を対象としても用いられる(注24)。

次に中国側の資料を見てみよう。徐霊府に関する伝記記事を伝えるものに、次のものがある(注25)。

①：唐徐霊府撰「通玄真経自序」（八一七序）

②：唐徐霊府撰「天台山記」（八二五）

③：唐劉処静撰『洞玄霊宝三師記』

④：唐趙璘撰『因和録』
⑤：南宋陳耆卿撰『嘉定赤城志』（一二二三序）
「巻之三十五 人物門四 道 徐靈府条」
⑥：南宋王象之撰『輿地紀勝』（一二二七序）
「巻十二兩浙東路 仙釋 徐靈府条 注」
…「臨安志云」として紹介。「臨安志」がいつの誰の手になるものかは不明。
⑦：元撰者不詳『天台山志』（一三六七）
⑧：明趙道一編修『歴世真仙体道通鑑』
⑨：清釈広賓輯・釈際界増訂『西天目祖山志』（一八〇四序）

先ず⑥に「徐靈府……嘗著述元鑑五巻天台記三巻(注26)」、⑧にも「徐靈府……撰天台山記三洞要略」とある。また『直斎書録解題』（南宋陳振孫撰）巻八に「天台山記一巻 唐道士徐靈府撰元和中人也」とある。これらによれば、唐の元和年間ごろに徐靈府という道士がおり、「天台山記」という名称の書を撰述したという。彼の居所についても、①に「黙希（徐靈府の号：稿者注）以元和四載、投迹衡峯之表」とあり、⑤に「居天台雲蓋峯、目爲方瀛」とあるように、先ず衡山にいて、後に天台山の雲蓋峯（方瀛）を居に定めたとある。また「會昌初頻詔不起」（⑤⑥⑧）とあるように、武宗より詔書もて召されたが、遂に出仕しなかったという。

以上見た、生存した年代、居住した地名、撰述した書名や出処進退などの諸点から見て、国会蔵本「天台山記」の撰者徐靈府と、中国側の資料に残されている徐靈府なる道士とが、同じ人物であることは間違いないだろう。そして、中国の伝記資料にいう「天台山記」が、国会蔵本のそれと同じものを指していることも、ほぼ間違いがないだろう。

次に徐靈府の伝記を、諸資料から概観してみる。

徐靈府、号は黙希子（①⑤⑧⑤⑨）という。出身は「錢塘天目山の人」（⑥⑨）で、元和四年（八〇九）に南嶽衡山に入り、華蓋峯に室を構えて修行に励んだ（①）。のち元和十年（八一五）に、天台山に移り（②）、長慶元年（八二一）ごろに雲蓋峯の虎嵒石室を「方瀛」とみなして居を定めた（②）。以後「以修鍊自樂」の日々を送ること「凡十餘年」（⑥⑧、⑨では「二十餘年」）であった。太和年間（八二七～八三五）には、葉蔵質とともに桐柏宮の再建に関わった（⑤⑥⑦）(注27)。武宗の会昌年間（八四一～八四六）に至り、頻りに詔によって召されるも、遂に出仕せず。やがて絶粒して寂化した（⑤⑥⑧）。享年

は八十二であったという（⑧）（注28）。

元和十二年（八一七）には「文子」の注釈書である「通玄真経注」を撰し（①）、また宝暦元年には「天台山記」を著している（②）。その他「玄鑑」五巻、「三洞通略」、「寒山子集序」があったという（⑥⑧）が伝わらず、その内容も伺い知ることは出来ない。また七言絶句が二首残っており（⑤⑧所収）、いずれも『全唐詩』に収載されている。

以上の記録から、錢塘・南嶽衡山・天台山など、江南地方を活動の舞台としていることが分かる。都へ出仕したり、貴戚・高官との交わりなどの世俗活動はあまり記されていない。「修鍊自樂」を追究する傍ら、経書の訳注や道教に関する著述を著すなど、文筆を得意とした学者風の傾向が強かったように見える。奇瑞や異能ぶりも伝えられておらず、どちらかといえば、実践より理論に強い道士であったのだろう。

次に道士としての道統を確認しておこう。

徐霊府の師は、田虚応（字は良逸）である。田虚応は薛季昌を経て、司馬承禎につながる系譜に位置する。虚応は、高宗の龍朔年間（六六一～六六三）に南嶽衡山に入り、州牧田侯の寄進による降真堂で修行したという。④には、「元和初、南嶽道士田良逸・蔣含弘、皆道業絶高、遠近欽敬、時號田蔣」という記事がある。南嶽で数多くの弟子を育てたが、元和年間に天台山に移り、まもなく羽化した。朝廷に出仕して活躍することこそ無かったものの「今江浙三洞之法、以先生田君爲祖師焉」（③）といわれるように、後世に強い影響を与えた道士であった。

田虚応の得道の弟子は三人おり、馮惟良（字は雲翼）、陳寡言（字は太初）、そして徐霊府である。この三人の弟子も、師匠について衡山から天台山に移っている。一派をあげて衡山から天台山に乗り込んだもののようであるが、その事情はよく分からない。あるいは南嶽に残った連中と確執があり、袂を分かって天台山で再起を期したのかも知れない。

徐霊府から見れば兄弟弟子にあたる馮惟良は、洞玄三師のひとりとして「藉師天台山桐柏觀上清大洞三徴君馮君」と称される（③）。元稹の信頼を得、桐柏宮の再建にも力があり、「以三洞之道、行于江表」の功績は、馮惟良にあると称された（③）。洞玄三師の三人目である道元先生応夷節（字は適中）、及び葉蔵質（字は含象）は、馮惟良の弟子になる。また唐末五代の有名な杜光庭は、その応夷節の更に弟子にあたる。

徐霊府のもうひとりの兄弟弟子の陳寡言は、「天台山

記」の本文にも触れられており、詩歌など文学的な方面にも優れていたようである。また④には「桐柏山陳寡言・徐靈府・馮雲翼三人、皆田之弟子也。……陳徐在東南、品第比田蔣」とあり、彼ら三人を、師匠筋にあたる田虚応や蔣含弘に比するものとの評価を下している。

以上徐靈府の周囲をめぐる道士たちを見てきたが、司馬承禎から杜光庭に至る、唐代道教の道統の一つに位置を占めていることがわかる(注29)。

五　徐靈府と「天台山記」

本節では、これまで検討してきた「天台山記」の内容上の特色と、伝記資料から明らかになった徐靈府の事績や思想傾向をあわせ考えておく。

徐靈府も師の田虚応同様、直接朝廷に出仕して、皇帝や貴戚、政府高官と親しく交わることはなかった。しかし、武宗からの招聘を受けていることなどからも伺えるように、決して「以修鍊自樂」ことでよしとしていたわけではない。道教の世俗世界（特に皇帝を中心とする政治世界）への浸透と影響力の拡大のために、大いに力を注いでいたものと思われる。馮惟良や葉藏質らとともに実現させた桐柏宮の重修は、そうした働きの一環であり、天台道教を称揚するべく取り組んだ、大きな事業であったといえる。また、「天台山記」本文には、唐の皇帝による「投龍」の儀式が、複数回記録されているが、これらも道教側の、皇帝権力への働きかけの成果といえるであろう。

また、南岳道教との関係も重要である。先の『因和録』によれば、田良逸と友善であった蔣含弘の門人に、周混沌なる道士がおり、「周自幼入道、科法清嚴。今爲南嶽主冠」と、南嶽衡山においておおいに勢力をふるったとある。あるいは田良逸一派の天台山移転の背景には、蔣含弘や周混沌らとの、江南道教界での主導権争いがあったのかも知れない。あるいは、天台山がやや凋落の兆しを見せており、田良逸が弟子一同を引き連れてこ入れに乗り込んでいったのかも知れない。いずれにせよ、徐靈府たちにとって、天台山は新しい根拠地となった「場所」である。天台道教の新たな興隆めざして、帝室との絆を深めるなどの政界工作を進める一方、天台山そのものにも目を向けて、その霊場聖地としての価値を高め称揚するべく、様々な活動が繰り広げられたのではないか。「天台山記」において、司馬承禎と天台山との結びつきが強調されたり、唐室との関係が繰り返し記録されている背景には、こうした天台道教側の思惑が存した可

能性も指摘できよう。

さらに「天台山記」に排仏的色彩が乏しかったり、極端な尚古主義の主張が見られないことには、撰者である徐霊府の性向や、会昌の排仏運動が荒れ狂う前の、比較的穏やかな当時の世相が反映しているのかもしれない。

おわりに

最後にこれまで述べてきたことと、今後の課題を述べ、本稿を締めくくることとする。

本稿では、先ず「天台山記」に関する文献学的な検討を行い、国会蔵本が基礎となる資料であることを確認した。次いで国会蔵本の由来に関して、智証大師円珍が将来し、その伝承・筆写に五大院安然が関わっている可能性があることを指摘した。さらに国会蔵本「天台山記」の内容を概観し、内容面での特色を何点か指摘した。さらに「天台山記」の撰者と目される唐の道士徐霊府について調査をし、最後に伝記資料と「天台山記」の内容との関連性を若干検討した。

本稿では、時間の関係もあり、右の問題についても十分に論じ切れていないところがある。また「天台山記」について、解明すべき課題は他にも数多く残されている。例えば、「天台山記」の中国での流布と散逸の問題、日本への将来とその後の伝承、さらには「天台山記」の周辺に存した、天台山に関わる他の文献資料との関係(注30)、そしてそれらの検討と並行して進められるべき「天台山記」の詳細な訳注の作成などである。「天台山記」以外の山岳地誌との比較検討も必要であろう。これらはすべて今後の課題としたい。

注

(1) 六朝時代・唐代の山岳地誌を概観したものに、青山定雄「支那の山川誌〜宋代以前〜」(『龍谷学報』第三三二号(昭和十七年)所収)がある。

慧遠の「廬山記」については、木村英一編『慧遠研究 本文篇』(一九六〇、創文社)に詳細な校訂と訳注が収載されている。

また左記の拙稿では、漢代より唐代までの、山岳地誌の逸本を蒐集し、解説を加えた。

○「漢唐地理書輯逸 その1
〜起漢至唐五嶽四瀆及諸名山書篇〜」

○「漢唐地理書目(稿)その2
〜起漢至唐五嶽四瀆及諸名山書記篇〜」

いずれも『平成十〜十一年度科学研究費補助金(萌芽的

研究）研究成果報告書 漢代より唐代に至る地方志書の思想史的研究』（二〇〇〇）所収。

（2）「清涼山伝」は、明代の刊本もあるが、『大正新脩大蔵経』巻五十一所収。さらに、塚本善隆・小野勝年両氏による訳注が、『国訳一切経和漢撰述部』史伝部十八（昭和三十七年、大東出版社）にある。

「南嶽小録」も、『正統道蔵』（洞玄部）や『芸海珠塵壬癸集』に収録されている他、近年『文淵閣 四庫全書』所収のものが影印出版された（『山川風情叢書』（上海古籍出版、一九九三）所収）。

「青城山記」は、『全唐文』巻九三二に収録されている。

（3）南宋陳振孫の『直斎書録解題』に「天台山記一巻」とあるのを最後に、書籍目録類で、徐霊府の「天台山記」の現存を伝えるものはない。

（4）『古逸叢書』の彫刻は、四代木村嘉平の手になるといわれるが、その技術の高さにはいまさらながら驚かされる。嘉平については、『日本書誌学大系 13 字彫り版木師 木村嘉平とその刻本』（昭和五十五年、青裳堂書店）等参照。

誤読や誤写と思われるものを、そのまま翻刻した例の一部を、次に掲げておく。

（例ア）：国会蔵本四丁表二行目「爰泊晉宗至于梁陳」の「宗」は、「宋」とあるべきであろう。

（例イ）：国会蔵本九丁表七行目の「太史崔尚製文翰林學士翰林學士韓擇木」では、「翰林學士」を重複表記。

（例ウ）：国会蔵本十九丁表三行目の「古之剡人劉曰成阮肇入山」の「曰成」は、一文字で「晟」とあるべきであろう。

（5）この資料は、森立之らによる「経籍訪古志」に、楊守敬がメモを書き込んだものとされる。詳細は、長澤規矩也「楊惺吾日本訪書考」（『長澤規矩也著作集』第二巻（一九八二、汲古書院）所収）参照。

（6）例えば、（4）に引いた（例ア）では、「宗」を「宋」に改めており、（例イ）の重複部分は省かれている。

（7）（4）に引いた（例ア）や（例イ）の部分は、陸心源本とは異なり、表記を改めずに原文をそのまま採用している。また大蔵経本での解読の誤りと思われる例も見られる。

（例エ）：国会蔵本一丁表七行目にあたる割注を「餘姚臨海處興句章」としているが、「處」は「唐」が正しい。

（例オ）：国会蔵本三丁表三行目にあたる部分を「道人浮近公」としているが、「近」は「丘」が正しい。

また、大蔵経本の脚注には「古逸叢書、京都帝國大学圖書館蔵本」とある。

なお、「天台山記」の訓読による訳注が、壬生台舜氏によって作成されている（『国訳一切経和漢撰述部』史伝部十八所収）。ここでは大蔵経本を底本とし、一部古逸叢書本によって字句を改めている。

（8）国立国会図書館の「ディジタル貴重書」のホームページアドレスを以下に紹介しておく。

○http://www3.ndl.go.jp/rm/index.html

ホームページには、現物の写真版とともに解題が附されているが、これは貴重書展の図録に収載の文章を転載したものである。

（9）国会蔵本には、ここに記した以外の蔵書印などは押されておらず、所有者を調べるすべがない。表紙に「円融蔵本」という書き込みがあることから、ある時期に、京都三千院円融坊に所蔵されていたであろうことが推測されるのみである。また国会図書館よりの刊行物などにも、この間の経緯を記したものは、管見の及ぶ範囲では見あたらない。

（10）前掲の国会図書館の解題によれば「展示本は料紙、書風などから平安時代の写本と推定される」という。仮にこれが贋作であれば、かなりの手間と費用を要したものであるということになる。この点からも、贋作の可能性は低いと言えよう。

（11）楊守敬の『古逸叢書』編集の姿勢については、長澤規矩也氏が、その信憑性に疑問を投げかけている（「古逸叢書の信憑性について」（『長澤規矩也著作集』第一巻（一九八二、汲古書院）所収）。本文で述べたように、「天台山記」の本文部分については、国会蔵本をかなり忠実に翻刻しており、意を以て文字を改めたところはない。しかし、表紙の作り替えや附録資料の差し替えなど、かなり重要な問題を含むものであり、注意を要する。

（12）「天台山記」の由来と述べたが、本稿では、国会蔵本の筆写者と、日本への将来者についての私見を、かいつまんで述べるに留める。平安時代以降、この資料が日本でどのような扱いを受けてきたのかという問題については、別稿で述べたい。

（13）末木文美士『大乗仏典（中国日本篇）第十九巻 安然・源信』（一九九一、中央公論社）解題。

（14）清和天皇は貞観十八年十一月に、陽成天皇に譲位しているが、年号の改元は、翌貞観十九年の四月になってからである。この年の四月十六日からが「元慶元年」となる。

（15）この点は、佐伯有清『円珍』（平成二年、吉川弘文館）などに詳しい。

（16）『大日本仏教全書』第二冊、『大正新脩大蔵経』巻五十五所収。

（17）比叡山の経蔵や蔵書目録については、佐藤哲英「初期叡

山の経蔵について」（『龍谷大学 仏教学研究』八・九号（昭和二十八年）所収）等参照。

（18）目録の名称は通称によった。より詳しくは、左記の諸書を参照されたい。

a：『園城寺文書』（講談社、平成十年）。本書は、園城寺所蔵の文書類を写真版で発行したもので、円珍の目録などについても、細かい筆使いまで読みとることが出来る。

b：小野勝年『入唐求法行歴の研究 ―智證大師円珍篇―』（昭和五十七年、法蔵館）。

c：石田尚豊「円珍請来目録と録外について」（智證大師研究編集委員会編『智證大師研究』（平成元年、同朋舎出版）所収）。

（19）「天台山記」は確かに道観や道士の記事が多く、道教的な色彩が強い書物である。しかし、その内容には、仏寺や僧侶に関する事跡もふくんでおり、排仏的な香りもない。仏者から見て、抵抗を覚えるような記事は見あたらず、名所旧跡を記した地理案内書的な読み方も可能なものである。

（20）紙幅の関係もあり、三例だけを掲げておく。丸数字で「天台山記」の該当部分を掲げ、「○」以下に「嘉定赤城志」の文を引用した。

①天台与桐柏二山相接而小異也（一丁裏五～六行）

○徐靈府記云天台山與桐柏接而小異（巻之二十一 天台山条）

②（瀑布寺）寺南九峯山、高百餘丈周迴六里亦天台有派幹也舊名九壟山天寶六載改為九峯山昔王逸少与支遁林常登北山以為勝矚也（五丁裏六行～六丁表二行）

○徐靈府小錄瀑布寺有峯山蓋白山之支幹名九壟唐天寶六年改今名王羲之與支道林嘗登焉（巻二十一 九峯条）

③壇前有塘名曰降眞塘、多植荷荅之類自塘南一里至洞門、外西南一里餘至王眞君壇（九丁裏六行～十丁表一行）

○徐靈府記云桐柏觀前一里石壇前有塘名降眞中植荷荇今自塘一里出洞門西峯卽王眞君壇也（巻二十四 降眞塘条）

（21）国会蔵本「天台山記」に数多く存する、誤写と思われる文字や文意が通じない部分の中には、伝写していく過程で生じたものではなく、円珍が筆写した初めの段階で誤まったものもあるのかもしれない。

（22）以下、「　」で示す小見出しは、稿者が便宜的につけたもので、「天台山記」の本文にあるものではない。

（23）この話は年代が合わない。唐代の白雲先生司馬承禎が、六朝期の王羲之に書法を教えられるわけがない。ここから、

六朝期に、司馬承禎とは別の白雲先生がいたのだという説も唱えられている（「天台山方外志」）。

(24) 例えば、「南嶽小録」には、「田先生有弟子。陳徴君・馮徴君・張徴君。三人不就徴、皆於天台山相次得道」（「唐朝得道人条」）などとある。

(25) 各資料の成立年は、それぞれの序文によった。④の「天台山志」については、本文中に「自乾道戊子…至今丁未變故、又一百九十九年」とある記事などにより、「一三六七年」の成書であると判断した。それぞれの書物の比較的入手しやすい収録先などは下記の通り。

①唐徐靈府「通玄真経 注」：『四部叢刊 三篇』・『正統道蔵』（洞神部玉訣別類）

②唐徐靈府「天台山記」

③劉処静「洞玄靈宝三師記」：『正統道蔵』（洞玄部譜録類）

…砂山稔氏は、本書の撰者は杜光庭であろうとされる（『隋唐道教思想史研究』「第十一章 杜光庭の思想」（平河出版社、一九九〇）四四〇頁）。

④唐趙璘「因和録」：『稗海』（『叢書集成』所収）

⑤宋陳耆卿『嘉定赤城志』：『宋元方志叢刊』第七冊（中華書局）

⑥宋王象之『輿地紀勝』：『中国古代地理総志叢刊』（中華書局）

⑦元撰者不詳『天台山志』：『正統道蔵』（洞玄部記伝類）

⑧明趙道一編修『歴世真仙体道通鑑』：『正統道蔵』（洞真部記伝類）

⑨清釈広賓輯・釈際界増訂『西天目祖山志』：『中国名山勝蹟志叢刊』第二輯（文海出版社）

(26) 「天台山記」の巻数について、『輿地紀勝』のみが「三巻」という。『直斎書録解題』は「一巻」、『歴世真仙体道通鑑』『西天目祖山志』では巻数を記さない。国会蔵本は本文だけで十九丁と、あまり大部のものではなく、「一巻」が正しいのだろう。

『輿地紀勝』が誤ったのは、徐靈府の他の著述に「三洞要略」があり、しかも「天台山記」と併称されることが多いため、その頭の「三」の字と紛れたのではないか。例えば「撰天台山記三洞要略」（『歴世真仙体道通鑑』）・「及撰天台山圖記三洞要略…」（『西天目祖山志』）などとある。

(27) 桐柏観の修復については、情報が錯綜している。

『嘉定赤城志』（巻三十 桐柏崇道観条）には「元稹記云、歳大和己酉、修桐柏観。乞事道士徐靈府以其狀乞文於余」とあり、『輿地紀勝』巻十二でも「景雲中道士徐靈府等重葺碑以大和四年立」として、徐靈府等による道観の修復を、

おおむね文宗の太和三年(八二九)から同四年ごろのことしている。

ところが、『天台山志』などには「太和咸通間道士徐靈府葉藏質重新修建」とあり、懿宗の咸通年間(八六〇～八七三)まで事業が行われたかのような記事になっている。(『天台山方外志』等も同じ)。咸通は、太和から三十年以上も後の年号である。徐靈府の没年は明らかではないが、後述するように、会昌年間からほど遠くない時期に死んだとするのが妥当であろう。そうであれば、咸通年間に彼が桐柏観の修復に関わった可能性は薄い。

また上記の『輿地紀勝』巻十二には「景雲中道士徐靈府等重葺」とあった。景雲は、徐靈府の衡山入山から百年近く遡った年号であり、時期があわない。玄宗の天宝元年(七四二)に作られたと思われる、崔尚撰述「桐柏観碑」(『輿地紀勝』等所収)には「我唐有司馬錬師居焉。景雲中、天子布命于下、新作桐柏観」とあり、司馬承禎に関係して桐柏観が創建されたという。おそらく『輿地紀勝』では、司馬承禎に関わる睿宗期の創建と、徐靈府に関わる文宗期の重修とが混同されているのではないか。

(28) ここから逆算すれば、徐靈府の生年は、粛宗の治世にあたる西暦七六〇年ごろということになる。しかし(27)でも見たように、道士に関係する活動や生没年には、不確定なものが多く、推定が難しい。徐靈府については、遡りうるのが「元和四年」の衡山入山であり、下限が「会昌年間」に出仕の詔を下されたことぐらいであろう。享年八十二歳とするのも、『歴世真仙体道通鑑』に初出の記事であり、どの程度の信頼性があるのかは疑問である。

(29) この他、徐靈府の「通玄真経 注」を検討した島一氏は、「徐靈府の師田虚応が呂渭・楊憑と密接な交渉があった」ことに注目し、「田虚応の周辺には、当時の新進の春秋学を奉ずる呂温や柳宗元、そして老仏を排して独特の仁義説を唱える韓愈が位置した」などとされている(島一「徐靈府の『通玄真経』注について」(『立命館文学』五一六、一九九〇年))。

(30) 例えば、唐初の釈神邕なる人物に、「山図」という著述があった。原本は早くに散逸したが『輿地紀勝』などに数条引用されて残っている。この書物は「天台山図」とも称された可能性があり、後世の資料では「天台山記」とまぎれていると思われるものもでてくる。こうした類似の名前を持つ資料などとも、あわせ考える必要がある。

＊本稿作成に当たり、国立国会図書館や慶応大学斯道文庫などには、資料閲覧などの点で多大な協力を戴いた。ここに記してお礼としたい。